

大豆種子生産の基本技術

令和 8 年 3 月
大里農林振興センター

採種ほ（里のほほえみ）の栽培暦

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	備考
生育ステージ		は種	開花		成熟期	収穫期	優良種子生産の目標 ・発芽率 80%以上 ・異品種の混入 絶無
各種作業	異品種混入防止	は種・除草剤散布 標札立て 異品種抜き 茎葉処理除草剤	中耕 異品種・雑草抜き	重点防除期間	異品種・雑草抜き	収乾燥・調製 異品種混入防止	種子伝染性病害 絶無 ウイルス病・斑点細菌病・葉病・紫斑病・べと病・炭そ病 ・水分 15%

栽培のポイント

1 確認作業

- ・原種配布時には数量を確認し、品種がわかるラベルをつける。
- ・どのほ場で大豆種子を栽培するか確認する。
- ・埼玉県指定種子生産ほ場であることを示す看板を設置する。
- ・採種ほ場は、原則として前作に同じ品種を採種したほ場とする。

2 ほ場の選定について

- ・湿害のない、排水良好のほ場を選定する。
- ・雑草の多発ほ場は避ける。畦畔からの雑草侵入にも注意する。
- ・隣接ほ場に異品種の作付けがないよう、近隣農家と連携を図る。

3 排水対策

- ・大豆は湿害に弱いので、弾丸暗きょや深耕等の排水対策を行う。
- 【額縁明渠の設置のポイント】
- 排水口へつながっているか
 - 明きょは逆勾配になったり、途中で埋まったりしていないか
 - 明きょの深さは最低 20 cm、できれば 30 cmになっているか

4 砕土、耕うん

- ・大豆の出芽に良好な砕土率（2 cm以下の土塊の割合 70%程度）を得るように耕うん、砕土は丁寧に行う。
- ・車速を遅めるほど、高 PTO ギアに入れるほど砕土率が高まる。
- ・砕土が悪いと出芽不良や除草剤の効果が劣るが、細かくしすぎると、降雨で表層にクラスト（土膜）が形成され、出芽不良となる。
- ・耕うんからは種、除草剤散布は同日に終わるよう計画する。

5 施肥

- ・基肥は窒素 3-リン酸 10 カリ 10 kg/10a とする。
- ・地力が低い場合は、たい肥を施用する。

6 は種

- ・種子消毒を行う。7月5日を目安とし、6月のは種を避ける。
- ・は種量を日に応じ調節する。苗立ちが少ないと、減収するだけでなく着莢位置が低くなり、収穫ロスが大きくなる。
（量の目安：採種栽培で、条間 70~80cm の場合）
7月上旬：6~7kg/10a（株間 8.0~9.5cm 程度）
7月中旬：8~9kg/10a（株間 5.5~7.0cm 程度）
7月下旬：10~11kg/10a（株間 4.0~5.0cm 程度）
- ・は種深は、3cm を基準に乾いているときは少し深く、湿っているときは少し浅くする。翌日以降の天気も考慮して作業する。

7 雑草防除

- ・毎年同様に管理すると、特定の雑草種が蔓延しやすい。多発している雑草種に応じた対策を行う。
- ・中耕の雑草防除効果は、畝間には高いが、株間には低いため、基本的には除草剤を先、中耕を後に行う。

8 中耕・培土

- ・初期の雑草発生が多い場合中耕で対処せず、は種 2~3 週間後に茎葉処理除草剤を散布し、枯殺を確認してからは種 30~35 日後頃に中耕する。
- ・培土は、不定根の発生、倒伏防止、排水対策、畝間灌水の効果がある。開花 1 週間前までに実施する。
- ・雑草の発生が少なく、茎葉処理除草剤を散布しない場合は、本葉 2~3 枚程度（は種 20~25 日後）にも中耕してよい

9 畝間かん水

- ・開花期前後の乾燥は、不稔や青立ちを著しく助長するため、中耕終了後~開花 40 日後の間に、無降雨期間が 1 週間程度続き、土が乾いてきたら畝間に通水すると、収量や品質低下を防ぐことができる。

10 異形株の除去

- ・疑わしい株は抜き取る！
- ・1回目→初生葉展開期（畝間の株、胚軸が紫色の株等）
- ・2回目→開花期（花が紫色の株、ウイルス病の株等）
- ・3回目→成熟期（莢色や大きさの異なる株、青立ち株等）

11 病害虫防除

- ・べと病：「里のほほえみ」はべと病が発生しやすい。開花後から子実肥大期に（8月下旬~9月中旬）に防除を徹底。
- ・紫斑病：種子消毒と開花 20 日後以降の薬剤散布を行う。
- ・カメムシ類：開花 20 日後以降の発生を観察し、防除を行う。大豆栽培で収量品質ともに最も影響が大きい
- ・ハスモンヨトウ：8月中旬から白変葉を観察し、防除を行う。
- ・アブラムシ類：褐斑病のウイルスを媒介。種子消毒で対処。

12 収穫

- ・コンバインの掃除を徹底する。
- ・倒伏や成熟ムラの部分は刈り分けし、種子にしない。
- ・しわ粒や皮切れ粒の発生を防ぐため、適期収穫する。
- ・降雨や朝露等の影響で株が濡れた状態での収穫を避け、株が乾いている晴れた日の昼頃に収穫する。

13 乾燥・調製

- ・作業場は常に清潔にし、施設、機械、器具も十分清掃する。
- ・子実水分が 15% 以下になるまで乾燥させる。ただし、過乾燥は割れ粒の発生の原因になるので避ける。
- ・急激な熱風乾燥は皮切れ・しわ粒が増加するので行わない。
- ・異品種や種子伝染性の病虫害粒（紫斑病、ウイルス病等）は確実に除去し、その他病虫害粒、しわ粒、裂皮粒、未熟粒はその程度により除去する。

<参考1> 大豆雑草防除おすすめ体系（タデ、ヒユ、ホオズキ類は両体系よく効きます）

	7月上旬		7月中下旬	7月末～8月頭	8月上中旬
	播種前土壌混和*	播種後土壌処理	播種2～3週後	播種4～5週後	取りこぼし（もしあれば）
イネ科雑草・センダングサ類が多いほ場	トレファノサイド	プロールプラス**	パワーガイザー***	中耕培土****	（アタックショット（広葉）、ポルト（イネ科））
アサガオ類・エノキグサが多いほ場	トレファノサイド	フルミオWDG	パワーガイザー	中耕培土	（アタックショット（広葉）、ポルト（イネ科））

*雑草が少ないほ場では、播種前土壌混和のトレファノサイドはなくてもよい

**「プロールプラス」は、「エコトップP」や「クリアターン」でも代用可

***「パワーガイザー」は、雑草が小さいうちにしか使えないが、非常に幅広い草種に効果がある

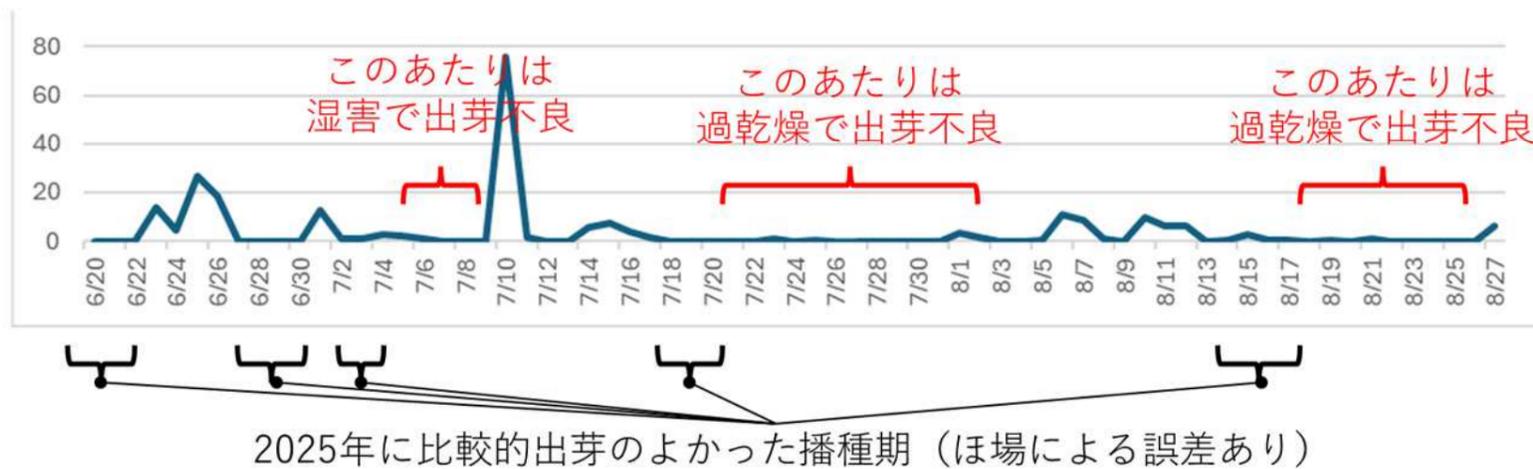
****茎葉処理剤散布と中耕培土の順番を逆にしないこと！！必ず、播種→土壌処理剤→出芽→茎葉処理剤→中耕培土の順番を守る！

<参考2> 高温・乾燥害対策技術について

近年の大豆栽培は、湿害よりもむしろ高温乾燥害が顕著になっています。高温乾燥害対策は、主には種時期の出芽不良への対策と、青立ちや減収等につながる開花期前後の結実不良への対策に分けられます。

は種時期の高温乾燥対策

2025年 熊谷市江南地区の降水量（mm）



- ・ 2025年は土壌が例年になく乾燥し、かなり播種が難しい年だった
- ・ 播種予定日以前に5～7日以上まとまな降雨がなければ、播種を遅らせて雨を待つことも検討する
- ・ もしくは、代かき前のようにいったんかん水して濡らしてから播種という方法も考えられる

開花期前後の高温乾燥対策

- ・ 培土後に無降雨期間が1週間程度続き、土が乾燥したとき
- ・ 日中に葉が立ち、ほ場の外から見ても葉の白い裏面が見える状態



- ・ 暗渠を閉め、水口の株が冠水しない程度でかん水
- ・ 水尻まで行きわたったら届いたら止水し、暗渠を開けて速やかに排水（長期間停滞すると湿害になる）
- ・ かん水が困難な場合、明渠のみのかん水、もしくはただ暗渠を閉めるだけでも多少の効果が期待できます

収量・品質向上、青立ち
低減効果が期待できる